

## 厚労省のワクチンの害評価は結論ありき

本誌はこれまで SARS-CoV-2（いわゆる新型コロナウイルス）ワクチンの害反応について数多くの記事を掲載してきた。ただし、そこで語られているのは、あくまで疫学調査結果という数字や、年齢・性別・基礎疾患で特徴づけられる匿名の症例であった。月刊誌「世界」8月号でノンフィクション作家の山岡淳一郎による「ルポ 副反応」の連載が始まった。そこには、ワクチン接種後3日目に亡くなった2人の男性（28歳、30歳）の人となり、遺族の辛い心境が語られている。そこには、数字等では表せられないかけがえのない個々の人生が語られている。COVID-19に罹患して亡くなるのならともかく、COVID-19にかからないための（重症化防止目的については104頁参照）ワクチンによって亡くなるのは理不尽であり、せめて死因を明らかにしたいというのは遺族の当然の要求であろう。

しかし、厚生労働省の厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会は、死亡例の99%を「 $\gamma$ 」：情報不足などにより評価できないという分類に放り込んで、因果関係の判断を逃がっている。残り1%は「因果関係否定」であり、「因果関係が否定できない」は0である。例えば3回目接種15分後にアナフィラキシーを発症し死亡した67歳男性の例も「評価できない」としている。「因果関係を認めない」結論ありきの方針を強く疑わせる。厚労省の新型コロナワクチンQ&Aには、「現時点でワクチン接種との因果関係があると判断された症例はありません。（中略）現時点で、新型コロナワクチンの接種が原因で多くの方がなくなっているということはありません。」（下線：筆者）とある。「因果関係は認めない」一方、将来は因果関係を認める可能性があるかのような「現時点で」との発言は、平然とデータ改ざんすることと共通する。

治療のために用いる治療薬剤と比べて、予防のためのワクチンの効果と安全性は遥かに厳しい基準が必要だ。SARS-CoV-2ワクチンは人類初のメッセンジャーRNAワクチンであり、害も未知である。まず、健康者接種バイアスも踏まえた適切な方法の疫学的調査を行い、因果関係がありうる害を知る必要がある。そのうえで、過去の個々の死亡事例について診療録を詳細に検討し、担当医へのインタビューおよび同居家族へのインタビューを行い、真摯に議論し、その議事は、個人情報情報を遮蔽した上ですべて公開し、外部の批判にさらされるべきだと考える。